

空想傾向と妄想的観念の関連と 心理的ストレス反応の関係についての検討

○平田 久子・岩永 誠
(広島大学大学院総合科学研究科)

問題と目的

空想と妄想は自己の内的な過程で現実世界とは別の虚構世界を思い描くという点で類似している。空想は内容をコントロールできる(松井, 2004)ということや、確信度(どれくらい事実として確信しているか)と心的占有度(思いをはせている時間)が低いということが妄想と異なっている。妄想は病的な症状だとされているが、妄想ほどの強さではない妄想的観念は健常者にも珍しいわけではなく(Fenigstein&Vanable, 1992)、健常大学生も有している(森本・丹野・石垣, 2001)。

Wilson & Barber (1981) は空想への深い没頭の特徴づけられたパーソナリティー特性を空想傾向(fantasy proneness)と名付けた。空想傾向には、病理性をもたらすネガティブな働きと生産的で創造的な体験をもたらすポジティブな働きがある(松岡, 2010)ことが指摘されている。

本研究では、空想傾向のポジティブ・ネガティブ効果に着目し、空想傾向、妄想的観念と心理的ストレス反応との関連を検討することにより空想と妄想の概念の違いと精神的健康に及ぼす影響を探索することを目的とした。

方法

対象者 A 大学と B 大学の大学生 434 名(男性 199 名, 女性 233 名, 不明 2 名, 平均年齢 19.5 歳(SD=1.80))。
手続き 質問紙を用いた調査。大学での講義の最後に調査用紙を配布し、その場で回答を求め、または質問紙を持ち帰らせて回答させた。

質問紙の構成 (1) 空想傾向: Creative Experience Questionnaire 日本語版(CEQ-J)(岡田・松岡・轟木, 2004) 22 項目, 0-5 の 6 件法。(2) 妄想的観念: Delusional Ideation Check-List: DICL(石垣, 2001) 16 項目, 0-5 の 6 件法。(3) ストレス反応: Public Health Research Foundation ストレスチェックリスト・ショートフォーム(今津ら・2006) 24 項目, 0-5 の 6 件法。

結果

因子分析 全ての尺度について主因子法・プロマックス回転で因子分析を行った。空想傾向は、「子どもの頃の体験」「空想の鮮やかさ」「想起力の高さによる体験」因子の 3 因子が抽出された。妄想的観念は

「ポジティブ感情の妄想的観念」「ネガティブ感情の妄想的観念」の 2 因子であった。ストレス反応は、「不安・不確実感・不信」「疲労・身体反応」「自律神経症状」「不快な気分」の 4 因子であった。各因子の平均を下位尺度得点とした。

空想傾向、妄想的観念とストレス反応との関係 不安・不確実感・不信, 疲労・身体反応, 自律神経症状, 不快な気分を目的変数とし、空想傾向及びポジティブ感情の妄想的観念, ネガティブ観念の妄想的観念を説明変数として重回帰分析を行い、結果を図 1 にまとめた。不安・不確実感・不信に対してはポジティブ感情の妄想的観念とネガティブ感情の妄想的観念が、疲労・身体反応に対してはネガティブ感情の妄想的観念で有意な関連を示した。また、自律神経症状に対しては空想傾向とネガティブ感情の妄想的観念が、不快な気分に対してはネガティブ感情の妄想的観念が有意な関連を示した。

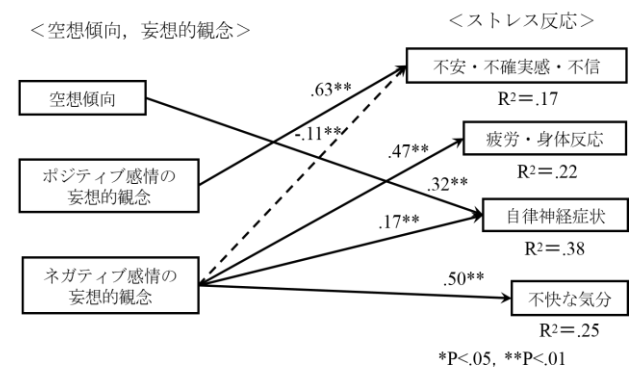


図1 空想傾向、妄想的観念と各ストレス反応との関係

考察

本研究の結果、空想傾向は自律神経症状に正の影響を与えていた。ネガティブ感情の妄想的観念は不安・不確実感・不信以外のストレス反応に正の影響を与えており、ポジティブ感情の妄想的観念は不安・不確実感・不信に正の影響を与えていた。健常者が自己の内的な過程で現実世界とは別の虚構世界を思い描く行為は、現実世界との区別ができているので、そのイメージの鮮明性や想起力の高く虚構世界に入りやすくても、内容がポジティブであれば精神的健康度は下がらない可能性があると考えられる。だが、ポジティブな内容とネガティブな内容が入り混じると精神的不安定に陥る危険性があると考えられる。